

曲目解説

研究熱心な各校顧問の選曲により、毎回充実したプログラムで注目されているジョイント。今回も話題作が目白押しです。この解説を楽しみにしている人も居るとの噂…。今回も頑張って書きますよ！

各校演奏

メモリーズ・オブ・フレンズ

Memories of Friends

真島俊夫

Toshio Mashima (b.1949: 日本)

真島俊夫の吹奏楽界での活躍としては、全日本吹奏楽コンクール課題曲(過去3回採用)をはじめとする作曲活動と、ポップス曲の吹奏楽への編曲など、多彩なレパートリーの提供があげられる。また、ジャズ・アンサンブルも手掛けるなど、幅広いジャンルで活躍している。

この「メモリーズ・オブ・フレンズ」は、1993年出版の「新・吹奏楽指導者全集」に添付された小編成向けの曲で、友人達と過ごした希望に満ちた輝ける青春時代が描かれている。ほんの少し不安とほろ苦さが混じっているとのこと。2002年に自身の経営する出版社で再販された。

青銅のイノシシ

Il Cinghiale di Bronzo

田中久美子

Kumiko Tanaka (b.1955: 日本)

香川県出身の作曲家、田中久美子は吹奏楽曲も数多く手掛けており、海外のコンクールで課題曲に選ばれた経歴も持つ。その作風はロマンに満ちたものが多い。2003年作曲「青銅のイノシシ」は、アンデルセン童話に登場するお話の1つを題材にした曲である。その内容は、イタリアの古都、フィレンツェの広場にある青銅のイノシシ像は、普段は口から澄んだ水が流れ出るだけであるが、無垢な子供が背中にのると、その間だけ街を走ることが出来るというもの。なお、モデルとなったイノシシ像はフィレンツェに実在する(もちろん走らない...)

3曲構成の組曲で、第1曲「星空を翔る夢」は、画家を目指す少年が、青銅のイノシシの背中で眠り込んでしまい、そのイノシシが真夜中に突然走り出した時の情景。第2曲「ポルタ・ロッソ通り」は古い歴史を持った実在の通りの名前。この物語の舞台である。通りの雰囲気や行き交う人々の様子が描かれている。第3曲「アルノ川の夕べ」は夕暮れのフィレンツェの街に響き渡る教会の鐘の音と街の風景が描かれ、曲は響きの中で静かに終幕を迎える。

第2組曲

Second Suite

ロバート・ジェイガー

Robert Jager (b.1939: アメリカ)

ジェイガーは高校時代から吹奏楽の作曲・編曲を行っていたという。優れた吹奏楽作品に授与されるABA(全米吹奏楽指導者協会)の「オストワルド賞」を過去3回も受賞するなど、かなり実績を持った作曲家で、70歳を間近に控えた現在でも、精力的に活動を続けている。

「第2組曲」は、偉大な音楽家パーシケッティ(1915-1987: アメリカ)の著書「20世紀の和声法」(1961)を、当時まだ20代の新進気鋭の作曲家であったジェイガーが読み、その内容を実践するために1965年に作曲された。いわば習作的な(練習のために作られた)曲であるのだが、1960年代の吹奏楽曲としては、かなりモダンな曲想、アグレッシブな試みが随所に見られる。前述の通り「和声法の実験」を背景に持ちながらも、「色彩」、「コントラスト」、「リズムの面白さ」といった要素を意識して作曲された。第1曲「ファンファーレ」、第2曲「バラード」、第3曲「スケルツォ」の3曲構成の組曲。音の流れに無理を感じさせない優れた曲で、第2曲のソロは大変美しい。第3曲の打楽器群や管楽器群のリズミカルな動きは実に小気味よく、何度聴いても飽きない。現代吹奏楽の発展期の曲であるが、現在でも充分通じる秀作である。

ナイト・アンド・デイ

Night And Day

ポーターは1920-60年代に、ミュージカルや映画音楽で大活躍し、数々のヒット作を残した作曲家である。この「ナイト・アンド・デイ」は、1932年公開のブロードウェイミュージカル「陽気な離婚」のナンバー。物語はイギリス人小説家が海辺のリゾートに出かけ、離婚を控えた女性と出会い、恋に落ちるというラブ・ロマンスである。「昼も夜もただあなた一人を想う。近くにいても遠く離れていても…」と歌い踊り、彼女の心をつかむ。1946年公開のポーターの伝記映画「ナイト・アンド・デイ」でも主題歌に使われて人気が再燃した。なお、近年ではポーターの生涯を描いたミュージカル映画「五線譜のラブレター」が2004年末に公開されている。DVD化されているので、彼の音楽に興味を持たれた方は、ご覧になると良いだろう。

コール・ポーター

Cole Porter (1891-1964: アメリカ)

セントローレンス川のこだま

- ケベック民謡組曲 -

Sounds of the Saint Lawrence - A Quebec Folk Song Suite -

カナダ東部地方には何千年もの昔から先住民族が住んでいた。この地方を流域を持つセントローレンス川は、五大湖と大西洋を結ぶ大河で、その河畔の先住民族が「ケベック」(川の狭まった所の意味)と呼んでいた場所に、フランス人が毛皮交易の拠点を作ったのが1608年である。これがケベック市の始まりとされており、現在は人口50万人の大都市に発展している。ケベック市は2008年に建市400周年を迎えた。その記念として委嘱されたのがこの曲である。

スパークは金管バンド(金管楽器+打楽器)編成の曲を得意としており、これらの多くが吹奏楽にも編曲されている。また、近年では最初から吹奏楽向けに書かれた曲も多く、現在、吹奏楽界で最も活躍している作曲家の1人である。今回演奏する「セントローレンス川のこだま」は、ケベックで親しまれている7つの民謡を織り込んだ3曲構成の組曲で、描写的な曲ではないが、素朴な民謡のメロディがケベックの情景を彷彿とさせる。第1曲は楽器の掛け合いが「こだま」のように響き合い、続いてテンポを速めて軽快に展開される。第2曲は雄大な大河を思わせる曲。第3曲はテンポ良く展開され、祝祭的なムードは最高潮に達する。

フィリップ・スパーク

Philip Sparke (b.1951: イギリス)

ボナパルト

Bonaparte

シュヴァルツは1992年に自身のスタジオを設立。放送業界のコマーシャル音楽、映画音楽などを得意としており、これまでに1000曲以上の作曲実績を持つ。また、吹奏楽曲も数多く作曲しており、ドラマティックな作風が受け入れられて、近年、急速に人気が高まっている。2008年新作「ボナパルト」は、フランスの英雄、ナポレオン・ボナパルト(皇帝ナポレオン世)の波瀾万丈の生涯をテーマにした曲である。現代音楽を得意とするシュヴァルツらしく、参考音源を聴くと、大砲の音などの特殊効果音が加えられている。今回の演奏会では、特殊な仕掛けは難しいが、それを外して聴いても、シュヴァルツの音楽の魅力は伝わるだろう。

新曲のため日本語解説が少なく、スコアの英文解説や楽譜出版社のカタログなどを参考に調べてみたところ、ファンファーレ風の幕開けから、ナポレオン誕生(1793年)以降の出来事、ヨーロッパ各国を征服する戦い、フランス皇帝即位(1804年)、ロシア遠征の失敗(1812年)、ワーテルローの敗戦(1815年)、そして南大西洋のセントヘレナ島への流刑にいたる、ナポレオンの生涯全体が、曲中に細かく描かれていることがわかった。なお、実際には、1821年にセントヘレナ島の流刑中に最期を迎えるが、この曲では、回想風のシーンを経て、ナポレオンの偉大さを讃える音楽で華々しく幕を閉じる。まるで映画音楽のような劇的な曲である。

オットー・シュヴァルツ

Otto M.Schwarz (b.1967: オーストリア)

1年生合同バンド

祝典への前奏曲

Prelude to a Celebration

スパークは世界的に高い人気を有する作曲家である(前頁参照)。交響曲のような高難度の大作から、小編成向けの曲まで幅広く手掛けており、世界中のバンドから作曲依頼があるが、かなりの速筆の持ち主で、毎年数多くの新作を書いている。今回演奏する「祝典への前奏曲」は、大阪にある「泉大津市吹奏楽団」が結成40周年を迎えるにあたり、スパークに依頼した曲である。2006年作曲。結成40周年を祝うファンファーレに始まり、躍動感あふれる親しみやすいフレーズがあらわれる。スパークの魅力が詰まった曲で、最後は力強く盛り上がる。

フィリップ・スパーク

Philip Sparke (b.1951:イギリス)

リバーダンス

Riverdance

1994年にダブリンで開催されたユーロビジョン・ソング・コンテスト(欧州放送連合の音楽コンテスト)の幕間にアイルランドが公開した約7分間の舞台は、観るもの全てを圧倒した。上半身を動かさず、足の動きだけで踊るアイリッシュ・ステップと呼ばれる伝統的な舞踏と、ウィーラン作曲のケルト音楽が見事に融合し、かつて誰も観たことのないパフォーマンスが繰り広げられた。これがリバーダンスの始まりである。現在、単にリバーダンスと言うと、この時に演奏された曲を指す場合と、後にウィーランが曲を書き足して制作された、2時間のステージ全体を指す場合があるが、今回演奏するブイテンハイス編曲版は前者にあたる。

曲の冒頭は、原曲ではソロヴォーカルとコーラスで優しく歌われる部分だが、管楽器でうまく表現されている。やがてケルト音楽の12/8拍子のリズムが現れ、次第に熱狂的に盛り上がりフィナーレを迎える。リバーダンスの洗練されたステップを思い浮かべてお聴き下さい。

ビル・ウィーラン

Bill Whelan (b.1950:アイルランド)

ホワイト・パスポート

- 夢に生き、光の国へ旅立ったある少女へのオマージュ - *Satoshi Yagisawa (b.1975:日本)*

White Passport to Heaven

八木澤教司

金光大阪高等学校吹奏楽部委嘱作品。同高校卒業の実在の少女の物語。足に癌が発見され足を切断しなければ命が数年しか持たないことを医者に宣告される。病院のベットで少しでも長く生きる人生よりも、夢であったミュージカルの舞台へ立つことを選び、見事オーディションに合格する生き方をした少女を讃えた作品。結果として19年という短い人生であったが、生きることの喜びを日々感じながら輝いて生き、決して諦めることなく夢を追い続けた。夢を叶えた人生を送った少女は「白いパスポート」を手にして光の国へ旅立った。この作品は少女が光の国へ旅立っていく物語を「憧れや夢」「苦悩」「勇気」「生きる力」「美しい命」の5つのシーンで構成。「美しい命」では少女の魂が、天に昇る姿をコラールで表現した。多くの若者たちに生きていることへの感謝の気持ち、夢に向かって努力することの素晴らしさを感じるきっかけになってほしいと、願いを込めてこの作品の制作にあたった。この少女の生き方は同高校の教訓であり、吹奏楽部顧問の小本和志先生からの強いご要望でこのテーマに誠意を持ってのぞんだ(八木澤教司)

八木澤教司さんは市川市在住の若手作曲家で、管弦楽曲、吹奏楽曲、アンサンブル曲など手掛けるジャンルは幅広い。ジョイント参加各校の顧問とも顔馴染みで、今回の演奏会でも全国を飛び回る多忙な仕事の合間に、合同練習の会場にお見えになった。また、市川西高校吹奏楽部のために全4楽章の大作「ザ・ウエスト・シンフォニー」を作曲、2006年3月に全曲完成した。次々と新作を発表しており、創作意欲は衰えを知らない。今回演奏する「ホワイト・パスポート」は2006年作曲。解説は八木澤さんのWeb Pageより借用して掲載しました。

2年生合同バンド

「GR」より シンフォニック・セレクション 天野正道

GR Selection pour l'orchestre de vent

Masamicz Amano (b.1957:日本)

1960年代に放映された特撮版「ジャイアントロボ」を原案として、1992年から6年間で全7話制作されたオリジナルビデオアニメ(OVA)は、横山光輝氏の原作のキャラクターを活かしつつも、原作とは異なり父と子の絆、エネルギー問題といった深刻なテーマが描かれている。

天野正道は大変実績を持った作曲家で、国際的な活動も展開している。純粋に管弦楽曲や吹奏楽曲も多数書くが、映画音楽、サブカルチャー(ゲーム、アニメなど)の音楽なども得意としており、幅広いジャンルで活躍している。アニメ版「ジャイアントロボ」(GR)の音楽もそのような活動の1つ。これを抜粋して作られた曲として、交響組曲第2番、第3番などの大作もあるが、今回演奏する「シンフォニック・セレクション」は、2001年に浜松市交響吹奏楽団の委嘱により編曲された別のバージョンである。ドラマティックな展開から人気も高い。次々と現れる曲が、どのような情景を描いたものか、手元の資料では判らなかった。しかし深く考えずに聴くのが良いだろう。色彩豊かな展開を経て、感動のフィナーレへと突き進む。

地獄の踊り

Danzas del Infierno - Dances from Hell -

バルト・ピクール

Bart Picqueur (b.1972:ベルギー)

第1曲：悪魔のダンスホール

第4曲：悪魔のワルツ

第2曲：悪魔のタンゴ

第5曲：悪魔のカンカン

第3曲：インテルメッツォ(間奏曲)

(第3曲は時間の都合で今回は演奏しません)

若手作曲家ピクールは、近年「交響曲第0番」、「ガリア戦記」で一躍脚光を浴び、日本でも熱心な吹奏楽ファンに高く支持されている。ピクールの2008年新作は「地獄の悪魔」を描いた作曲者の考えた架空映画の音楽で、5曲構成の組曲である。各曲のタイトルからも想像出来るが、いずれも短調の暗い曲である。しかし、タンゴ、ワルツ、カンカンなど、通常は明るく軽やかな踊りのリズムを、短調で暗く表現するあたり、作曲者の遊び心を感じずには居られない。第1曲では不気味な「Welcome」の声、第4曲では突然掛け声が入る。第5曲は強烈なインパクト。高音木管の不思議な旋律、低音パートの奏でる不気味な踊り。大注目！

鳳凰が舞う 印象、京都 石庭 金閣寺

La danse du Phoenix

真島俊夫

Toshio Mashima (b.1949:日本)

真島俊夫は日本を代表する作曲家の1人である(前頁参照)。2001年作曲の人気作「3つのジャポニズム」の続編になるような曲を書いて欲しいとの意向を受けて、2005年、京都をテーマにした曲を書き上げた。日本的な題材を西洋的な技法を駆使して完成させた傑作。2006年フランスで開催された国際作曲コンクールでグランプリを獲得。国際的にも評価されている。

古都の歴史の重みを感じさせる低音群の序奏に始まり、ホルンのソロを合図に祭り囃子のような軽快な曲へと発展する。中間部は一転して静寂に包まれ、竹林を吹き抜ける風、鐘や鹿威し(ししおどし)の音が聴こえてくる。これは枯山水で有名な竜安寺の石庭の情景である。テンポを取り戻すと鳳凰の舞いとなる。大空高く舞い上がっていく音楽は、金閣寺の屋根の上で、今まさに天に向かって羽ばたこうとする鳳凰の姿そのものである。ところで、鳳凰は空を飛ぶ鳥ではなく、「時空」を飛ぶ鳥とされている。千年の都(京都)の長い歴史の中を、過去と現在との間を時空を超えて往来する姿が思い浮かぶ。きっと鳳凰は未来にも飛んで行くだろう。2年バンド100名の若き才能が、情熱の全てを炸裂させる。プレイヤーの頭上に舞う鳳凰は、輝かしい未来に向かって今まさに羽ばたく。これぞジョイント。お聴き逃しなく！